

ダウトゲーム

五十嵐貴久

d o u b t

〈動詞〉 1、(人、事を) 疑う。信用しない 2、(……を) 疑問に
思う。信じない 3、(……を) 心配する。気づかう

〈名詞〉 1、(……かどうかの) 疑い。疑惑、疑念、不信、懸念 2、
疑わしき、不確かさ、不明確

〈小学館プログレッシブ英和中辞典〉

プロローグ

1

激しく咳き込んだ拍子に、男は目を覚ました。

暗闇の中、エアコンの音だけが聞こえる。気分が悪い。

パジャマの首回りがびっしょりと濡れている。何だこの寝汗は、と上半身を起こした。

出張先のナイジェリアから日本に戻ったのは五時間前だ。帰りの

機内で、既に悪寒おかんがしていた。

三共商事さんきやうナイジェリア支店で会った支店長代理の赤ら顔が、頭に浮かんだ。咳とくしゃみを繰り返していた。

手で顔を拭ぬぐうと、鼻水が垂れているのか、手のひらに不快な感触があつた。鼻も詰まっている。

これでは眠ることもできない。ベッドから降りて洗面台に向かった。

目眩めまいがする。体が鉛のように重く、鼻水も止まらない。

洗面台までの数メートルが、とてつもなく遠く感じられた。壁に手をつけて体を支えながら、明かりをつける。

また咳き込むと、周囲に赤い染みが飛び散った。赤。どういこうとだ。

洗面台の鏡で自分の姿を見た。目がカラーコンタクトを入れたように赤い。

真っ赤な汗が、頬にひと筋垂れている。腰が抜けて、そのまま座り込んだ。

這うようにしてリビングへ戻り、床にあったジャケットのポケットを探った。スマホで119と押す。手足が激しく震え始めていた。

2

午前一時半、品川のマンション、メゾン・フレールの駐車場に、十台以上の車両が到着していた。救急車、パトカー、疫学研究所の車両、消防の化学車。医師や警官、消防署の化学部隊、救急隊員、救命士、看護師、科学者、その他五十人以上の人間が集まっている。誰もがおびえた表情を浮かべていた。そこかしこで、携帯電話の着信音が鳴っている。

マンション前の道路にも、数台の大型車が止められていた。人数は増えていく一方だ。

「どうなんでしょう、やまたに山谷先生」指揮所になっているワゴン車の中で、緊張した表情を浮かべた消防服の男が言った。「やはりコロナですか？　しかし、出血という症状は聞いたことはありません」

周りに四人の男がいた。警察関係と保健所の担当者だ。

疫学研究所の連絡待ちです、と口ひげを生やした中年の医師が言った。山谷かすしげ和茂、疫学研で伝染病の研究をしている専門家だ。山谷が現場の指揮を執っているのは、厚労省の指示だった。

「患者は田沢幸一、三十七歳」三共商事勤務、と山谷は言った。「出張先のナイジェリアから、昨日の夕方四時に帰国しています。成田空港の検疫所では、発熱その他の症状がなかったため、帰宅を許可されています。水際対策を徹底しなければ駄目だとあれほど言ったのに……。PCR検査の結果は陰性でしたので、コロナではなく、現地で流行しているエボラ出血熱に感染した可能性が高いと思われるんですが、まだ確定していません」

「まずいことにならなきやいいんだが」制服を着た五十代の警察官が顔をしかめた。「エボラ出血熱なんて……」

「可能性の話です」対処の方法もあります、と山谷は笑みを浮かべた。「警察の手配は済みましたか？」

「マンションの封鎖は完了しています。第二方面本部から、全面的に協力すると先ほど連絡がありました」

うなずいた山谷の手元でスマホが鳴った。宝田たからだだ、とスピーカーホンから男の声が流れ出した。疫学研の主任担当者だ。

「結論が出た。簡易血液検査をしたところ、エボラではなかった」五人の男たちが安堵あんどのため息を漏らした。コロナの新症状ですか

と尋ねた山谷に、ラッサ熱の亜種だと宝田が答えた。

「WHOの報告によれば、二カ月前にナイジェリア西南部で流行が始まった。現地ではコロナより患者が多いらしい、だが、致死率一パーセント以下、感染率三パーセントの病気だ。ワクチンもあるし、フェーズ1で済むだろう。ナイジェリア政府の発表では野鳥やネズミがウイルスの宿主だというが、感染経路はまだ不明だ。空気感染の可能性も否定できない」

「どう対処しますか？」

「今、厚労省の担当者と話したが、感染症法の適用ケースということになる。汚染された可能性のある場所を特定し、徹底的に除染する。コロナ対策で後手を打ったから、万に一つも間違いがあつてはならないと厚労省は考えているようだ」

警察の調べで、ナイジェリアからの帰国便は判明しています、と山谷は言った。

「同乗していた客、パイロット、CAその他を追跡し、空港から自宅までの帰宅経路も調べています。すぐ報告が入るでしょう」

「コロナの教訓が生きたな……そこは警察に任せよう。君はマンシヨンの除染だ。封鎖は完了したんだな？ 夜中だろうが何だろうが、全戸除染だ。絶対極秘、住人にはコロナ対策と伝えた方がいい。マスコミに漏れたら大騒ぎになる」

「了解しました」

「夜明けまでには終わるな？」

「問題ないでしょう。疫学研から警察庁、総務省に連絡を入れてください」

わかった、と宝田が電話を切った。どうしますかと囁いた制服の男たちに、皆さんの協力が必要だと山谷は言った。

3

メゾン・フレールは六階建てのマンションだ。部屋数は三十、それほど大きいとは言えない。

厚労省の指示の下、警察と消防が全面協力し、建物自体の封鎖と除染が始まったのは金曜日の深夜二時だった。住人も含め、人が出入りする可能性はほとんどない。汚染の拡大は考えにくかった。

部屋を訪れるには遅過ぎる時間だが、除染は法律で規定されている。山谷は医師たちに警察官と消防士を複数名つけ、すべての部屋に向かわせた。

緊急の招集だが、二十名の医師がいる。人数に不足はない。

まず、メゾン・フレールの住人がコロナに感染したと医師から説明させた。先週、感染力の強い新種株が発見されたためか、早く消毒してほしいという要請が住民からも相次いだ。

一時間後、午前三時過ぎ、全戸の除染が終了したという報告が入ったが、一室だけ応答がない部屋があった。四階、405号室。

たかむらよしお

「高村良雄という表札があるんですが、チャイムを鳴らしても返事がありません」

スマホのスピーカーホンから、医師の畠山はたけやまの声が流れた。疫学研で山谷の五期下の研究員だ。

「寝ているわけでもないようです。帰宅していないのかもしれないかもしれませんね」

それならその方がいい、と山谷は答えた。

「不在なら感染も何もない」

「しかし、室内から鳥の鳴き声が聞こえます」畠山がか細い声で言った。「インコか九官鳥だと思うんですが」

「鳥？」

「そうです。感染の宿主が野鳥だという情報が入っていますよね。

どうしますか？」

ちよつと待て、と山谷は周囲を見回した。

「マンションの管理会社の人は来ていますか？」

眠そうな目をした太った男が手を挙げた。何かあった場合に備え、部屋の鍵を開けるために警察が呼んでいた管理会社の社員だ。

「合鍵はありますか？」

スペアキーを持ってこいと言われたので、と男が肩に下げている小型のバッグを降ろした。

「全戸分あります。ですが、居住者の部屋を管理会社が勝手に開けるといのは……」

そんなことは頼んでいない、と山谷はぶつきらぼうに遮った。

「合鍵があればいい。後は我々がやる」

鍵を渡すように言うと、男が405号室の鍵を差し出した。

各部屋を廻っている医師たちは、まだ戻っていない。手が空いているのは山谷だけだ。警察官二名、消防士二名と共にエレベーターで四階へ向かった。

405号室は廊下の右端にあった。畠山がドアの前に立っている。山谷は鍵を開け、細く開いたドアの隙間から、高村さんと名前を呼んだが、返事はなかった。

留守のようです、と畠山が言った。鳥が気になる、と山谷は靴のまま廊下に入った。

「念のため、この部屋も除染しよう。高村という住人には、後で事情を説明すればいい」

消防士たちが準備に取り掛かった時、かすかな鳴き声が聞こえてきた。リビングに鳥がいます、と警察官が言った。

「インコです。どうしますか？」

「籠ごと外へ」写真を撮っておこう、と山谷は指示した。「後で高村氏に説明する際、必要になる。鳥には触れないように」

警察官が鳥籠に向けてシャッターを数回切った。黄色い小鳥が首を細かく揺らしながら鳴いている。

もう一人の警察官が寝室のドアを開けた。畠山が消防士にリビングの除染を命じている。

山谷は洗面所に入った。手袋はしているが、汚染の可能性がある場所だ。携行している液体石鹸で手を念入りに洗ったのは、疫学研の医師としての習慣だった。

ハンカチで手を拭い、別の手袋をはめた。その時、バスルームの磨りガラス越しに気配を感じた。

「……高村さん？」

声をかけてから、バスルームのドアを開けた。青ざめた顔の男がぶら下がっていた。

首を吊っている^っと気づくのと同時に、足の感覚がなくなり、山谷は尻から床に崩れ落ちた。

Part 1 発端

八月十五日土曜日、早朝五時半。品川桜警察署刑事係の橋口志郎はしぐちしろう 査長は上品川四丁目のマンション、メゾン・フレール品川405号室にいた。

緊急招集命令があったのは一時間前だ。泉岳寺せんがくじの自宅から駆けつけたが、先着していた同僚の刑事たちの表情にさほど緊張したものがないのを見て小さく息をついた。

室内のバスルームで死体が発見されたとしか聞いていなかったが、事件性はないようだ。病死か、あるいは自殺か。

指揮を執っていた岩上警部補いわがみに現着報告をすると、悪かったなどと苦笑した岩上が、自殺らしいとだけ言って、鑑識員に報告を命じた。

肩を叩かれて振り向くと、同じ巡查長の南部裕一なんぶゆういちが欠伸あくびをしていた。

「お疲れ……って、おれも同じなんだけどな。すぐ来いと言われたが」来てみたら自殺だとさ、と南部が肩をすくめた。「それはそれで大変だけど、わかっていれば慌てずに済んだのに」

仕方ないとうなずき、南部に目をやった。派手なチェックの柄のジャケットを着ている。志郎は地味なグレーのスーツ姿だ。

二人とも一八〇センチほどの身長だが、やや痩せ気味の志郎と比べると、南部の方が体格がいい。同じ三十三歳という年齢でも、年相応にしか見られない志郎と、二十代でも通用する南部とでは、何

から何まで違う。

自分の方が顔立ちは整っていると志郎は思っていたが、署内の女性警官の気は俺の方がある、というのが南部の口癖だ。

まったく似ていない二卵性双生児と周りから呼ばれるほど、ライフスタイルや考え方が違うが、誰よりも馬が合った。仕事だけではなく、プライベートでも親しくしている。

「どうする？ ここにいても邪魔なだけだ。正面にファミレスがあったが、モーニングコーヒーでも飲むか？」

タクシーを飛ばしてここまで来たのは、お前とコーヒーを飲むためじゃない、と志郎は顔をしかめた。

「どうなってる？ 何があった？」

「仏さんを見るか？ 今、ちょうど運び出すところだ」

南部が親指を立てた。数人の男がバスルーム前の狭いスペースで声を掛け合っている。

「殺しじゃないんだな？ 自殺なのか？」

首吊りだよ、と南部が答えた。

「高村良雄、四十歳。この部屋の住人だ。片山興産かたやまっていう建設会社に勤めていた。こいつは社員証だ」

テーブルに置かれていたビニール袋に入ったプラスチックのカードを指さした。ワイシャツを着た精悍せいかんな男の顔が写っていた。

「会社に電話したが、誰も出ない。時間も時間だし、土曜だから休みなんだろう。他の連絡先はまだわからん。調べてるところだ」

「誰が発見した？ 同居人か？」

昨夜遅く、このマンションで急病人が出たんだ、と南部が声を潜めた。

「ナイジェリア帰りの商社マンで、現地で伝染病にかかったらしい。感染率が高い危険な病気だとわかって、大騒ぎになった。各部屋の除染をしていた時、医者がこの部屋で死体を見つけた。夜中の三時過ぎだ」

「三時？ おれに連絡があつたのは一時間ほど前だぞ。四時半とか、それぐらいだった」

みんなそんなもんだよ、と南部が欠伸をかみ殺した。

「警察も首吊り死体が発見されたのはわかってたんだが、それより除染が先だつてことになった。コロナで敏感になつてるんだよ。現場に警察官や医者がいたから、高村の死亡確認は連中がやった。先に来ていた岩上さんが入ろうとしたが、除染が終わるまで入室は禁止すると言われたとき。死んだ奴より生きてる奴の方が大事ってことだろう」

「その伝染病は……大丈夫なのか？」

「検査したら、想定より感染力が弱いとわかったそうさ。大騒ぎし

てたのに、拍子抜けだよ……出て来たぞ」

白衣を着た二人の男が、バスルームから担架たんかを運び出していた。顔に布をかぶせられた死体の腕が垂れている。

高村だ、と南部が囁ささやいた。

「見るか？　かわいそうに、鑑識が来るまで三時間近く放つとかれたんだ。顔が青黒くてな……首なんか吊るもんじゃないね」

「見たくない。自殺で間違いないんだな？」

「部屋に争った痕跡こんせきはない。きれいなもんだ」例の伝染病騒ぎで住人のほとんどが起きていたから、早朝だが事情は聞けたと南部が言った。「昨夜七時頃、帰ってきた高村とマンションの下ですれ違った者がいたし、エレベーターの防犯カメラに映っているのも確認できた。その後、外出した様子はない。帰宅後、しばらく経ってから首を吊ったんだらう。鑑識の話じゃ、十時前後のようだな」

「一人暮らしか？」

「そうだ。部屋の様子を見ても、女と暮らしていた気配はない。女性が入りしていたと住人が話していたが、どういう関係かはまだわからない」

「死体の状況は？」

「不審なところはない。バスルームの中に洗濯物を干すバーがあるんだが、そこに細いロープをかけて首を吊っていた。低いが、浴槽よくそうの

縁から飛び降りたんだろう」

「そうか」

早めに見つかってよかったよ、と南部が唇を曲げた。

「金曜の夜十時に首を吊り、エアコンは切ってた。土日が休みなら、会社の人間も連絡はしない。出社していないとわかるのは月曜になる。どんなに早くたって、誰かがここへ来るのは月曜の夜以降だ。このくそ暑い中、三日間放っておかれたらどうなると思う？ 想像しただけで吐きそうになる」

「知らんよ、そんなこと……どうして自殺したんだ？」

「まだわかっていない。それが最後のピースだな。はまればパズルは完成だ」

岩上警部補、という声があった。リビングに置かれていたパソコンを調べていた高品刑事が、こちらです、と呼んでいる。どうした、と岩上が寝室から出て来た。

「遺書が見つかりました」高品がマウスをクリックした。「デスクトップにあったんですが、開いてみたら……」

画面を覗き込む岩上の後ろに志郎は廻った。画面に文書ファイルがあり、「会社の皆様へ」とタイトルがついていた。南部が文面を読み上げた。

「人生に疲れました。これ以上生きていくのが辛いのです。ご迷惑

をおかけしますがお許してください……おっしゃる通りだ。人生は辛いもんだよ」

決まりだな、と指を鳴らした。岩上がうなずいた時、すいませんという女の声が玄関から聞こえた。

「ごめんなさい……遅れました」

ショートヘア、紺色のパンツスーツ姿の若い女が入ってきた。遅い、と志郎はその肩を軽く突いた。

「紀子^{のりこ}、いつも言ってるだろ？ 連絡があったらすぐ現場に駆けつけろって。メイクや服なんかどうだっていいんだ。刑事って仕事は——」

「しょうがないでしょ、お兄ちゃん」橋口紀子がしかめっ面になった。「女子はね、どうしたって支度に時間がかかるのよ」

「女子っていうのはな、女の子って書くんだ。お前はもう女の子じゃない。二十八歳は立派な女性だ」

「まだ二十七です。誕生日は再来月」

小さく舌を出した紀子に、南部が軽く手を振り、仲良きことは美しきかな、と志郎の肩に腕を回した。

「その辺にしときなさいって。兄妹ケンカは猫も食わないってね。お兄ちゃんも少しぐらい遅れたからって、カリカリしなさんな」

「お兄ちゃんは止める」お前の兄貴になった覚えはない、と志郎は

南部の腕を振り放した。「紀子のことはおれが考える。おれの教育が悪いつて話になったら困る。現場に直行するのは刑事の基本だ。そんなことも守れないなら……」

「直行はしたわよ。遅れたのは悪かったけど、謝ったでしょ？ しつこくない？」

うつすら陽に灼けた頬を上気させて、紀子が志郎を睨んだ。

静かにしてくれ、と岩上が喉の奥で笑った。

「二人きりの兄妹じゃないか。ケンカ腰にならんでもいいだろう」
「すいません、と志郎は頭を掻いた。わかってます、と紀子が頭を垂れた。」

親子、兄弟で警察に奉職するのは珍しくない。警察組織ではよくある話だ。ただ、同じ警察署、同じ部署で働くのはレアケースかもしれない。

意図していたわけではなかった。三年前まで、志郎は警視庁本庁の組織犯罪対策課に所属していた。

だが、新宿で発生した暴行事件の現場に向かうと、抵抗した犯人の中国人マフィアが同僚の刑事をナイフで刺し、瀕死の重傷を負わせるという不測の事態が起きていた。やむを得ず発砲したのが志郎だった。

警告のために空へ向けて一発撃ったが、犯人がナイフで同僚の腹

部を刺そうとしたため、肩を撃たざるを得なかった。正当防衛を主張し、懲罰委員会ちようばつもそれを認めたが、マスコミの批判を浴び、半年後に所轄署の品川桜署へ異動となった。

明らかな左遷だが、処遇に不満はない。撃たなければ同僚は死んでいたはずだが、それでも撃ってはならないというのが日本の警察のルールだ。

紀子は大学卒業後、四年間の交通課勤務を経て、二十六歳の時に品川桜警察署の刑事課に転属していた。桜署での歴は紀子の方が古い。刑事としての経験は志郎の方が長い。

兄妹が一緒に部署で働くのはやりにくいだろう、と周囲の人間に言われたが、そう思ったことはない。ケンカもするが、兄妹仲はいい方だ。同僚として働くことに、違和感はなかった。

志郎としては、安心でもあった。両親を早くに亡くしているため、自分が紀子の親代わりだという意識がある。目の届くところで働いていれば、不安を感じることもない。

暴力組織を相手に神経を擦り減らし、場合によっては一触即発の事態に備えなければならぬ毎日に疲れてもいた。本庁勤務から外れたのは、そういうタイミングだったのだろう。

品川桜署に移って約二年半経つが、めったに大きな事件は起きない。今日もそうだった。

死体が発見されたという第一報に緊張したが、自殺だと結論が出ている。変死事件だが、面倒なことにならないのは経験上わかっていた。

「本当に自殺なんですか？」

紀子が岩上に聞いた。声の調子に、残念そうな色が混じっている。

「殺しの方がよかったって？ 不謹慎ふきんしんだぞ、お前」

志郎は肩を小突いた。そうなんだけど、と紀子が苦笑いを浮かべた。

「でも、その……こんな朝早くから呼ばれて、結局自殺でしたって言われると……」

紀子は最近まで殺人事件の捜査に本格的な形で加わったことがなかった。経験不足のため、係長の藤元が担当から外すようにしていた。臨場させても、混乱するだけだろう。

数カ月前、ようやく現場での捜査を許可されたが、皮肉なものでそれから殺人事件は起きていない。意欲が空回りしているのは、志郎もよくわかっていた。

「そりゃ、殺しじゃない方がいいですよ。いいですけど……」未練がましく辺りを見回していた紀子が、テーブルに置かれていた数葉のポラロイド写真を取り上げた。「へえ、かわいい……インコですか？」

そうらしい、と南部がうなずいた。

「高村が飼っていたんだ。このマンションで伝染病の患者が発見されて、建物全体が封鎖されたのは——」

それで死体が見つかったんですよね、と紀子が言った。

「じゃあ、その時にこのインコも？」

「ウイルスに感染してるかもしれないから、感染研に運んだそうだ。ある意味、死体より危険だとさ」

死体は嘔み付いたりしないからな、と岩上が低い声で笑った。

「さて、鑑識の報告が出揃った。全員、集まってくれ。状況を整理する」

指示に従って、刑事たちがリビングに入ってきた。うなずいた岩上が、まず発見時の状況だが、と説明を始めた。

2

午前十一時、志郎は署に戻り、高山が勤務していた片山興産という建設会社に連絡を入れた。何度か電話をかけていると、午後になって休日出勤していた社員が出た。

総務部長が出社しているのがわかり、しばらく待っていると、耳に当てていた受話器の向こうで空咳からせきが聞こえた。

「片山興産総務部の桑山くわやまと申します」戸惑っているような声だった。

「今、社員から聞いたのですが、高村部長が、その……」

「申し上げにくいのですが、お亡くなりになりました」隣に座っていた紀子にも聞こえるように、志郎は電話をスピーカーホンに切り替えた。「確認も済んでいます。間違いなく高村良雄さん本人です」

わたしは品川桜署の橋口と申します、と付け加えた。それは、と桑山が言葉を途切れさせた。

「……いつたい、どういうことでしょうか。何があったんです？」

「今調べていますが」志郎は音量を上げた。「どうやら自殺のようです」

「……自殺？」

隣の席を見た。紀子がかめ面で電話機を見つめている。

「自宅の浴室で首を吊っていました。携帯電話が部屋で見つかりましたが、緊急連絡先が不明でしたので、とりあえず会社に知らせるべきだと判断しまして——」

「それは……はい、そうしていただいでよかったです……高村部長が自殺ですか？ それはその、何と言えいいのか……」

「お察しします」

「とにかく驚きましたとしか……」上ずった声で桑山が言った。「ですが……いや、そうですか……」

「そうですか、とおっしゃいますと？」

「高村は営業部長なんですが」桑山の声がしつかりしてきた。「営業部の者から、高村部長の様子が少しおかしいという話は何となく聞いていたんです。言われてみると、どこか上の空といえますか……弊社の真田社長も、高村はどうしたんだと話してしまして……」

「社長が？」

「真田は営業部の役員も兼職しておりますので、高村の直属の上司に当たります」

「何かそういう……兆しといえますか、変だと思ふようなことがあったわけですか？」

「部署が違いますので、わたしも正確に把握してはおりませんが、遅刻や欠勤が多くなっていると聞きました。無断欠勤も何度かあったようです。真田社長が事情を聞くための場をセッティングしましたが、はっきりした理由は言わなかったそうです。悩みがあったのは、確かだと思えます。様子を見て、総務として対処するつもりだったんですが……」

「高村さんの携帯電話には、会社関係以外の電話番号が名字しかなかったんです」親戚、友人なのか、関係性がわかっていませんと志郎は言った。「結婚はされていないようですが、ご両親やご兄弟はどうなんでしょうか？ 誰に連絡しているのか、我々もどうしたものかと……」

「確か、大学生の時にご両親を亡くされていたはずですよ。一人っ子だと話していたのを覚えていますが、親戚の話まではしていませんので……」

総務部長といっても、社員全員の履歴を把握しているはずがない。親戚の話をする社員など、めったにいないだろう。

「申し訳ないんですが、品川までお出で願えないでしょうか？」志郎は電話機に向かって言った。「事情を伺いたいのですが、こちらは品川桜署といひまして、高輪二丁目の……」

「もちろん、すぐに伺います。そうですね、二時間ほどいただければ……住所は調べますから大丈夫です。品川桜警察署の、ええと、橋口さんですね？」

「刑事係の橋口です。わたしの名前を受付でおっしゃってください」では後ほど、と桑山が電話を切った。社員の自殺は総務部長にあって大問題だ。駆けつけるのは当然の義務だろう。

片山興産のホームページを探してるんだけど、と紀子がパソコンの画面を指さした。

「ないみたい。今時珍しくない？ 住所はわかった。姫原村だって」

「姫原村？」

「八王子のずっと奥。すごいところにあるよね」

「建設会社だからなあ……よくわからんが、そういうものかもな。」

最寄り駅は？」

五日市線いつかいちの秋川駅あきがわだと思う、と紀子が言った。待つしかないな、

と志郎は椅子を二つ並べて足を投げ出した。

「早く帰りたいんだがな」

「お兄ちゃん、行儀悪いよ」

紀子が膝の辺りを叩いた。お前も休んだ方がいい、と志郎は言った。

「休む時は休む。刑事ってのは、そういうもんだ。来たら起こしてくれ」

はいはい、とうなずいた紀子がマウスをクリックした。秋川駅から品川まで一時間四十分だって、と言う声を聞きながら志郎は目をつぶった。

3

午後三時過ぎ、着古した暗色の背広姿の中年男が、警察官に案内されて刑事係に入ってきた。片山興産の桑山さんですという声に、志郎は素早く体を起こした。

「先ほどは電話で失礼しました。品川桜署の橋口です。わざわざすみません」

「同じく橋口です」

紀子が頭を小さく下げた。ご夫婦ですか、と桑山が驚いたような顔になる。よく言われますが、と志郎は手を振った。

「兄妹なんです。応接室へどうぞ」

取り調べではない。事情を確認するために呼んでいる。取調部屋の奥にある応接室へ桑山を通した。

「お座りください」布張りのソファを指した志郎の後ろで、紀子がドアを開けた。「今、お茶を……高村さんのことで、少しお話を聞かせていただきたいのですが」

桑山がポケットから出したハンカチで首筋を拭った。

「わたしもとにかくびっくりしてまして……総務で働いて二十年以上になりますが、社員が自殺したというのは初めてです」

紀子が備え付けの小さな冷蔵庫から麦茶を出して紙コップに注いだ。すいません、と口をつけた桑山が、高村は有能な部長でしたと話し始めた。

「実績もありますし、仕事熱心といえますか、他に楽しみがないような働きぶりです……部下からの信頼も篤く、統率力もあり、会社の評価も高い男です。最前線で働く部長、といったところでしょうか」

「なるほど」

「一年ほど前になりますが、真田社長の肝入りで進めていたプロジェクトについて、意見の相違があったという話を聞きました。です

が、それほど大きな問題ではなかったと思います。プライベートで何か悩みがあったのではないのでしょうか」

紀子が麦茶を注ぎ足すと、ありがとうございます、と桑山が一気に飲み干した。篤実たくじつそんな顔は、農民を思わせるものがあつた。中肉中背だが、がっしりとした体つきがそう感じさせるのかもしれない。

他に問題はありませんでしたか、と志郎は質問した。

「部長ということですが、いわゆる中間管理職ですよね？ 上と下の板挟みになっていたとか、そんなことは？」

聞いておりません、と桑山が首を振った。

「高村はずっと営業ですが、部員は三十人ほどでしょうか。うまく束ねていたと思いますよ。行動力のある男で、自ら率先そっせんして動くタイプでしたから、部下も尊敬していました。わたしより三つか四つ下ですが、頭も切れますし、人間関係のトラブルとは縁遠い男ですよ」

スマホのアドレス帳に、高村という名字の方がいません、と紀子が顔を上げた。

「ご両親は亡くなられているんですね？ ご親戚の方と連絡を取りたいのですが、どうすればいいでしょうか？」

高村は大学を卒業後、うちに入社しておりますと桑山が小脇に抱

えていたカバンに手を突っ込んだ。

「どこに入れたかな？ 社を出る時、彼の履歴書を持ってきたはずなんですが……東京の出身だったのは覚えています。保証人は誰だったか……親戚の方だと思いますが、お手間は取らせるわけにはいきませんから、わたしの方から連絡します。警察に迷惑はかけられません。葬儀の手配も会社でやります。面倒をおかけして申し訳ないです」

「高村さんの年齢は？」

「ちょうど四十です」

「早くに親御さんを亡くされ、ご兄弟もいなかったわけですか……お一人だったんですね？ 何と言えはいいのか……」

志郎も両親を亡くしていたが、紀子がいた。力になってくれる親戚もいたし、寂しいと思っただけではない。

高村は一人で生き、一人で死んでいった。孤独な人生を悼む^{いた}気持ちがあった。

「高村さんは……寂しかったでしょうね」

紀子がつぶやいた。同じことを考えていたようだ。

「こちらへ来る途中、葬儀社と連絡を取りました」桑山が片手で薄くなっている髪の毛を押さえた。「会社として、きちんとした形で送り出したというのが真田社長の意向です。高村のことを伝えまし

たが、できるだけのことをするようにと指示がありました。もちろん、わたしもそのつもりです。近くに身寄りがいないのはわかっていますから、会社がやりませんと……あの、遺体はどちらに？ 早めに引き取りたいのですが」

「お気持ちにはよくわかります。ただ、変死扱いになりますので、検死をしなければなりません」

何のためでしょう、と桑山がしゃが嗔れた声を上げた。

「自殺なんですよね？ こういう言い方はあれですが、あまりきれいなものではないと思います。整えて送り出したんです。遺体を切り刻んでどうしようと？ そんなことしたって、意味はないですよ」

個人的にはそう思いますが、と志郎は頭を掻いた。

「法律で決まっていることなので……手続きを踏まないと、お渡しすることはできないかと」

「何とかありませんか。法律はわかりますけど、そこは目をつぶっていただけでも……誰の得にもならないじゃないですか」

自殺の場合、遺族のほとんどが桑山と同じことを言う。感情としては理解できた。上と話します、と志郎はうなずいた。

「できる限り意向に沿った形でと思いますが、法律上難しいのも確かです。我々の立場もご理解ください」

もちろんですとうなずいた桑山に、片山興産について話を聞くと、社員が六百人ほどの建設会社だとわかった。大手とは言えないが、中堅クラスの規模だ。

取引先として、いくつかの大手ゼネコンの名前を桑山が挙げたが、有名な会社ばかりだった。営業部長だった高村のメインの業務は、他社と交渉し、仕事を受注することだったという。

「正直なところ、私は入社以来総務ですので、営業部の仕事については、よく知らないんです」

六百人規模の会社だと、部署が違えば業務内容はわからないだろう。志郎もあえて詳しく聞かなかった。

ご協力ありがとうございましたと礼を言って、志郎は腰を上げた。いろいろすみません、と桑山が頭を深く下げた。

「片山興産の社は姫原村ですか？」応接室のドアを紀子が開けた。「高村さんは品川から入社されていたんでしょうか。遠くて大変だったのでは？」

それでもありません、と桑山が手を振った。

「都心まで電車で一時間半ほどですし、車で現場に直行する社員の方が多いで、かえって楽なんです」

わざわざすみませんでした、と志郎はエレベーターのボタンを押した。

「とんでもありません。こちらこそご迷惑ばかり……」紺色のドアが開き、桑山がエレベーターに乗り込んだ。「何かありましたら、いつでもご連絡ください。よろしく願います」

頭を下げた桑山の前でドアが閉まった。ザ・総務部長だ、とつぶやいた志郎に、紀子が小さく肩をすくめた。

「ちゃんとした会社だってわかる。それでも、自殺する社員がいるんだなって」

「そういう時代なんだよ」戻ろう、と志郎は廊下を歩きだした。「事情はわかった。藤元係長に報告だな」

疲れた、と紀子が大きく伸びをした。

4

その後も各方面への連絡があり、志郎は他の刑事たちと署で報告書をまとめる作業に入った。金曜の夜中なんかには自殺するんじゃないよと南部が不平を言ったが、こればかりは仕方ないだろう。

自殺は深夜か明け方に多いし、平日も休日も関係ない。年に数回は、こういう日があった。

単純な自殺なので、マニュアル通りに処理するのは難しくない。夜七時を過ぎると、上の者から順に帰宅していった。

ただ、九十九パーセント自殺で間違いないが、検死の結果によっ

て引つ繰り返ることも有り得る。そのために連絡要員が待機しなければならぬが、志郎は自ら手を挙げていた。

独身だから、帰りを待つ家族がいるわけではない。紀子をつきあわせることにしたので、話し相手もいる。日曜は休みだが、特に予定はなかった。

出前で取ったピザを紀子と食べてから、鑑識や医師に確認の電話を入れたが、解剖はまだだと返事があった。連絡があるまで、待つているしかない。

三十分に一度、電話をしたが、答えは同じだった。壁の時計が十時を指したのを確かめて、帰ろうと志郎は紀子に声をかけた。

「医者も何も言ってこない。解剖の順番待ちだと言ってたけど、明日に回されたんだろう。係長は九時まで待てと言ってたけど、もういいんじゃないか？」

警察って効率悪いよね、と読んでいた雑誌を紀子がデスクに置いた。

「どうして昔のやり方にこだわるのかな。十年前ならともかく、今はスマホやメールもあるのに、何で署で待機してなきゃならないの？」

ガラケーの時代ならともかく、誰でもスマホを持っている。検死の結果報告書も、自宅のパソコンに転送可能だ。それでも誰かが残

っていないなければならない、というのが警察の伝統だった。

捜査係のドアをノックする音が聞こえ、若い警察官が入ってきた。

「橋口さん、今朝の自殺の件なんですけど、ニュースで取り上げられてましたか？」

「いや、どうかな？ テレビには出てないはずだ」ジャケットの袖に手を通しながら志郎は答えた。「本庁に報告はしたけど、自殺だからな。ネタにならないと記者クラブは思ったんじゃないか？」

ネットニュースにはなっていました、と紀子がトートバッグを抱えた。

「名前は出ていませんが、上品川のマンションで建設会社の社員が自殺したと……。何かあったんですか？」

振り向いた警察官が、後ろにいた女性を呼んだ。

「こちらの方が……失礼ですが、もう一度お名前をお願いできますか？」

はるのひろみ

「春野博美といいます」女性が少し吊り上がっている目を志郎と紀子に向けた。「ネットのニュースを見て、嫌な予感がしたんです。それで、いろいろ問い合わせしてみると、こちらへ来るようにと……自殺したのは高村良雄さんでしょうか？」

「高村さんとは、どういう関係ですか？」

交際していました、と博美が答えた。紀子がデスクにバッグを置

く。入ってください、と志郎はうなずいた。

5

刑事係の応接室に博美を通し、志郎は紀子と並んでソファに腰を下ろした。

三十歳前後だろう。スレンダーな体型に、薄手の黒のジャケット、黒のパンツが似合っている。美人だが、表情に独特な陰があった。春野と申します、と博美が取り出した名刺をテーブルに載せた。

「イベントの制作会社で働いています」

志郎は名刺に目をやった。ナグー音楽事務所という社名に、海外のアーティストを呼んでコンサートを開く会社ですよ、と紀子が言った。

「知ってます。学生の時、よく行ってたので」

「今日、会社がしょうかい招聘したミュージシャンの記者会見があったんです」

アーティスト名を言ったが、志郎は知らなかった。曖昧にうなずくと、博美が先を続けた。

「ネットニュースは夕方ぐらいに見ていましたが、わたしは通訳を担当していたので、こちらへ何うのが遅くなってしまうて……」

構いません、と志郎は手を振った。

亡くなったのは本当に高村さんでしょうか、と博美が小声で言った。

「信じられません。何があったんです？」

志郎は紀子と目を見交わした。どこまで話していいのか。

だが、真剣な表情で、博美が高村と交際していたのが確かだとわかった。事実を伝えるべきだろう。

「高村さんですが、昨夜自宅で自殺されました」志郎は自分の手のひらを見つめた。「バスルームです。偶然発見されて……」

息を呑んだ博美が顔に手を当ててうつつむいた。しばらく沈黙が続いた。

「ネットニュースには、実名や詳しい情報は出ていないはずですが」紀子が怪訝そうな表情を浮かべた。「それだけで、高村さんだとわかったんですか？」

「そこまでは……ですが、どうしても気になって、テレビ局に勤めている友人に電話を入れると、高村良雄という人だと教えてくれて……」博美が正面から二人の顔を見つめた。「高村さんが自殺するなんて、考えられません」

「ですが……」

三カ月前、プロポーズされました、と表情のない顔で博美が言った。

「年内には籍も入れることになっていました。どうして彼が自殺を？ そんなわけありません」

「失礼なことを言うようですが、本当にプロポーズを——」

「嘘を言うために、警察へ来ると思いますか？」

投げつけるように言った博美がハンカチで鼻をかんだ。待つてください、と志郎は片手を上げた。

「会社の方に伺いましたが、高村さんは何かで悩んでいたようだと……ご存じでしたか？」

うなずいた博美が肩を落とした。

「半年ほど前から、一緒にいても何かに気を取られているような……どうしたのと聞いても、何でもないんだと言うだけでした。わたしも五月で三十になりましたし、二人の将来のことで悩んでいるのかと思ったこともあります。以前、結婚を考えたことがないと彼が話していたので……でも、プロポーズされて、思い過ぎだと安心していったんですが……」

「半年前、何かあったんでしょうか？ 思い当たることは？」

「わかりません。一年ぐらい前から、考え込むことが増えていた気もしますが、はっきりわかるようになったのは半年前です。彼が抱えている悩みが大きくなっているようで、何があったのか聞いただけのこともあるんです。でも、答えてくれなくて……」

「言いにくいのですが、女性関係とか……」

「そういう人ではありませんでしたし、もしそうならわかったでしょう」誠実な人でした、と博美が言った。「仕事上のトラブルが起きたんだらうと思っていました、聞いてみてもそうじゃないんだと言っただけでした」

「二年前から交際していたわけですね？ 高村さんは四十歳で、あなたより十歳上です。建築会社の社員とどんな接点があったんです？ 誰かに紹介されたとか？」

そうではありません、と博美が首を振った。

「わたしは京急の三崎口、高村さんは品川に住んでいますが、偶然同じ電車に乗り合わせたことがあったんです。彼の会社が取引している大手ゼネコンが三崎口にあつたからですけど、それがわかつたのは後になってからで……」

「待ってください。どういうことですか？」

「二年前の夏、電車に乗っていた時、酔っ払いに絡まれたんです。博美の頬がかすかに赤くなった。「しつこくて、困っていました」

「高村さんが助けてくれたんですか？」

身乗り出した紀子に、そういうことになります、と博美が苦笑した。

「高村さんが注意すると、揉み合いになりました。でも、彼は柔道

か何かの経験があったので、あつと言う間に倒したんです」

「ドラマみたいですね」

うなずいた紀子の脇腹を、志郎は肘で突いた。刑事として不穏当な発言だろう。

そうかもしれません、と博美が言った。

「本当に困っていたので、助けてもらったお礼を言おうと思ったんですが、高村さんは酔っ払いを駅員に引き渡すと、名前も言わずにその場を去ってしまつて……」

なかなかできることじゃありません、と志郎はうなずいた。でも、と紀子が首を振った。

「それじゃ、どうやって高村さんと再会したんですか？」

ドラマチックな話ではないんです、と博美が言った。

「次の日、同じ駅へ行って、お礼が言いたいのであの人を捜しますと駅員さんに話しました。本当はいけないそうですけど、落とし物の名刺入れがあったところり教えてくれました。あの騒ぎのすぐ後だったので、男性が落としたんでしょうと……」

「それで？」

「わたしから本人に渡したいと言いました。いろいろあったんですけど、結局名刺入れを預かることになって……それで彼の名前と会社の電話番号がわかりました。すぐに連絡して、会うことになった

んです。その時はお礼を言って、LINEのIDを交換しただけですけど、何度か食事をして、交際を始めました」

「では、片山興産の社員だとわかっていたんですね？」

「もちろんです」

「仕事の内容は？」

「建設会社の営業部長だと……六百人規模の会社だと聞いています。仕事ができる人なのは、話していてわかりました」

「高村さんの交友関係はご存じですか？ 友人を紹介されたことは？」

「ありません。わたしも友人を紹介するのが苦手な方でしたから、気にはなりませんでした」

「ご家族のことは？」

「ご両親を早くに亡くされたのは聞いています。叔父が九州に住んでいると話していました。籍を入れたら挨拶に行くことになっていました。彼も頻繁に会っていたわけではなかったようです」

高村さんは品川に住んでいたんですね、と紀子が首を傾げた。

「会社の方にも言ったんですけれど、通勤が不便だったのでは？」

取引先の関係だと聞きました、と博美が言った。

「三崎口にメインの取引先のゼネコンがあって、週に何度か通っていたそうです。姫原村からだとても遠いので、会社が品川にマンション

を借りてくれたと話していました。他にも取引先の会社が都心にありましたから、それも考慮してくれたのだと思います」

「なるほど」

「わたしと高村さんの関係は、うまくいっていましたが」疲れたのか、博美の声が低くなった。「彼は四十歳ですし、わたしも三十歳になって、お互いを必要としていたんです。彼はわたしの仕事にも理解があり、結婚しても働くことになっていました」

「そうですか」

「高村さんが自殺するなんて、そんなはずありません。三カ月前にプロポーズされて、今後のことも話し合っていたんです。絶対にあり得ません。何かの間違いです」

「ですが、亡くなられていたのは高村さんです」志郎は現場で見つかった高村の社員証を、ビニール袋に入れたままテーブルに載せた。

「この方に間違いありませんね？」

写真に目をやった博美がため息をついた。会社の方や同じマンションの住人にも確認済みです、と志郎は言った。

「自殺していたのは高村良雄さんで、それは確かです」

「でも……」

「おっしゃりたいことはわかるつもりです。遺体が発見されたのは今朝早くで、まだ解剖の結果も出ていません。疑わしいことがあれ

ば調べます。今の段階では、それしか言えません」

無言のまま、博美が立ち上がった。それ以上話しても意味がないとわかったのだろう。

エレベーターまで見送った紀子が戻ってきた。どう思う、と顔に書いてある。わからない、と志郎は言った。

「彼女はあんなふうに言ってたけど、他に自殺する理由があったかもしれない。仕事のトラブルか、借金があったとか……そもそも、うまくいっていたというのは彼女の言い分に過ぎない。プロポーズしても、思い直すことはあるさ。そんな男は世間にいくらでもいる」
思い直すぐらいなら最初からプロポーズしないでほしい、と紀子が唇をすぼめた。

「男の人はね、女性のことを全然わかってないの。本当に男って……」

「何かあったのか？」志郎は兄の顔になった。「前から聞こうと思っていたけど、南部とつきあってるのか？」

「ノーコメント」

「反対してるんじゃないぞ。ただ、あいつはおれの友達だ。友達なら守るべき一線がある。ちゃんと挨拶があつてしかるべきだ。そんなこともできないような奴とつきあうなんて、おれは許さ——」

帰ります、と紀子がトートバッグを抱えた。

「明日も出ななきゃならないでしょ？ シャワーぐらい浴びたいんですけど」

話は終わってないと言ったが、振り向くことなく紀子が出口に向かった。妹と一緒に職場というのも考え物だ、とつぶやきが漏れた。

くっくく